
この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

朧月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

この願いが届くのならば……「裏」～Side Conan ver
er

【Nコード】

N6833C

【作者名】

朧月

【あらすじ】

変わり始めたのが何処からだって？決まってるだろ、それはこの生活に何の違和感も感じなくなった時だ。壊れたのがいつからだって？壊れたなんて表現が間違ってる。時の流れは残酷だった。大切なものも捻じ曲げていった。それでも、オレは後悔なんてしてねーよ。時間が経つても、コノ日々を、そして真実をしっかりと手にする事が出来たんだからな 江戸川コナンになって過ごした沢山の時間。今この瞬間を、隣にいる大切な存在と共に、ずっと生

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

き
続
け
て
い
る
。

プロローグ：『哀しみと願い』（前書き）

このお話は、この願いが届くのならば……（N5200C）http://ncode.syosetu.com/n5200c/の裏にあたる、コナンSIDEからのお話です。

読んでなくても、ストーリーは繋げているので判るかも知れませんが、私はそちらを先に読む事をおススメします。

そして、本編に当たるそのお話同様、今度は視点が視点なため、確実にコ哀要素が含まれております。（だからと言って、コナンと蘭が不仲な設定は全くありません）ご覧になられる際にはその点頭に入れてお願い致します。

プロローグ：『哀しみと願い』

「コナン君、よかったね！ 哀ちゃんも元気になったし」

「ああ。……本当に、歩美ちゃんには世話かけたね。悪いな」

歩美は、悲しげに小さく笑い、俯いた。元からだが、こいつは随分とませたガキだと思う。けど、まさかこんなにこいつの世話になるなんてなあ、まだついこの間までのオレは想像できたっけ？

沢山傷つけたのに、沢山教えられた。自分より十も実年齢の幼いガキにだぞ？ だから、歩美には凄く感謝してる。

「じゃあ、ね。バイバイ。また明日、学校でね！」

「おう！」

手を振る歩美の顔が泣きそうなおかしいものに見えたのは、夕陽で赤色がゆらゆら揺れていたからではない。今の言葉が、単なる互いの家に帰るだけの意味の「バイバイ」でない事も、鈍いオレにも何となく判った。

明日からの歩美は、多分オレへの想いを断ち切ってくるだろう。あいつにとって大切な親友である、灰原との変な確執が生まれることを、避けるために。

プロローグ：哀しみと願い

「灰原、しっかりしろ！ おい！！」

ずっと、朦朧として話していたこいつの意識がついに途絶えたのは、救急車が到着するほんの僅か前だった。左胸の上部と、左腕、そして、右腕とわき腹。それぞれに負った傷からどくどく流れている血が、ケガをしていない筈のオレまで痛く感じた。

こいつ、意識を失う最後に、何て言った？ ”ありがとう”??
バー口、そんなもん、オレは一度も望んでねーんだよ！ そんな事より、オメーが消える事の方が、ずっとずっと……

「死んだりしたら、許さねえぞ！ 目え開ける。こらー！！」

バカだな、何取り乱してんだ？ オレ。はははっ、こんなにもこいつに必死になれんのに、なんでいつまでもこいつへの気持ちを認める事から逃げてんだよ。

けど、今にも死んじまいそうで……少しでも、この力をなくした手を握り締めるのを緩めたら、今にも手の届かない場所へ行っちゃまいそうで、どうしようもねえんだ。

「冗談だと思われたまま、死なすのかよ？ そんなの、オレが最悪だろ？」

あの日、アイツへの想いを茶化した。自分の心に嘘をついて。でも、そんなの間違ってたんだよ。灰原にも、蘭にも、オレはあのままだと最悪の過ちを犯して終わる事になっちゃった。

「なあ、灰原……今更、オレが本気でオメーの事が好きだって言ったら、どうする？」

卑怯だろ、そんなの。いつの間にか、工藤新一と別の自分が生まれて、そいつは工藤新一と全く別の感情を持って。待たせてた両思いの筈の女は家族で、戦友のような存在だった筈の女は、いつの間にか好きな人に代わってた。

「今度こそ、本当の事を喋れるから。頼むから、生きて、目開けて、聞いてくれよ」

なあ、灰原。お前、頑張るために……幸せになる為に努力したんだろ？ オレが幸せにしてやる。だから、オレの願いも聞いてくれよ。

「こんな事で、負けるな！」

もうすぐ病院なんだ。だから、もう少しだけ頑張れば、生きられるんだ。

「最後まで勝ち抜いて、歩美や探偵団達と、オレと、一緒に帝丹小の通学路歩くんだろ？ キャンプにも、またこれから博士引率で連れてってもらえばいいじゃねーか」

言っただろ、灰原。運命から逃げるなって。こんな別れ、寂しすぎるだろ？ なあ、誰でもいい。こいつに届けてくれねーか。明美さん、こいつの事も見守ってるなら、頼むから。生きるって、伝えてやってくれ。いつも、自分の命を軽視してる、危なっかしい奴だから。

「そんなお前だから、守ってやりたくなっただのかもな」

何を言っても堅く閉じている瞳。そこから、そっと頭を撫でた。

「生きて、目が覚めたら……オレに惚れる」

他の看護婦に聞かれないように、灰原の耳元で囁いた。

「そうしたらオレは、責任持ってオメーを必ず幸せにしてやるよ」

なあ、届いてるか？ 灰原。意識がなくても、ちゃんとオメーに届いてるか？

オレの、必死で切実な願い。見えないように頬に触れた、さりげなく小さなキスと共に。

どうして、こんな風になったんだろうな。オレは、いつからこんなにこいつの事を……

頭の中に何度もそんな疑問が浮かんで来た。いつの間に、彼女が同じ目線で隣に居た。本当はそれだけの、単純な事だった。それがいつ、自分の中で別の気持ちとして変化して行っただろう。

プロローグ：『哀しみと願い』（後書き）

作者より

皆さん、こんばんは！

そして、初めての方ははじめまして。作者の朧月と申します。このお話を、こうしてお読み頂ける事を嬉しくおもいます！

『この願いが届くのならば……』の裏として、あちらは哀ちゃん側から、こちらでは完全なコナン側からのお話です。

もちろん、裏ですので。重複しているシーンは幾つかありますが、あちらとは違った感覚で読んで頂けるかな？と。

基本的に、短期間の更新を予定しています。

話自体はもう完成しているので、一日一話で一週間以内に完結させられるかな？と。

こんな未熟なものではありますが、お楽しみいただければ幸せです。v

それでは、今回もまた、よろしくお願い致します！

FILE 01：『動揺と変化』

鳴り響く電話の音に、半ば強引に起こされた。

あれ、いつの間に眠ってたんか……？ もう、六時か。蘭、買い物からまだ帰って来てねーんだな。

「ふあい、毛利探偵事務所です」

「あつ、コナン君？」

「蘭姉ちゃん。どうしたの？ 買い物に行ってるんでしょ？」

夕飯の買い物だよな、一時間も何やってんだよ。

「うん……お父さん居るかな？ 雨降って来ちゃったみたいだし、私傘持ってないから車でお迎え頼もうと思ったの」

雨。降ってんのか？ カーテンを開けてみれば、確かにザーザー降りだ。なるほど。蘭の奴、買い物帰りに雨に降られてどっかで雨宿りしてんな？

「んー、ごめん。おじさん今居ないんだ。でも、僕やる事ないし、傘二つ持ってそっち行くよ」

「え、いいの？ 悪いけど、頼んじゃおっかな」

「うん。準備する時間は待たせちゃうけど。だから、今居る場所教えてくれる？」

杯戸商店街……って、歩いて行くには遠いなあオイ。安売りスパーに行くとは言ってたけど、何も夕飯の買い物に隣町まで行かなくてもいいじゃねーか。受話器を置いて、そのままオレと蘭の傘を持って行く。

外、随分暗いじゃねーか。まったく、蘭の奴、雨が降らなきゃこ
を一人で帰るつもりだったのかよ。相変わらず、女としての自覚が
薄いつつーか、なんていうか。幾ら空手が強くなったって、怖がりなク
セによー。お、雷も出始めたな、早く行ってやらねーと。

雨の中、濡れた地面を走る音が、バシヤバシヤうるさく耳に響い
ていた。

「あつ、コナンくん！」

すぐに呼び止められたから、探す手間は省けた。申し訳なさそう
に手を振っている蘭に、笑って駆け寄る。

「蘭姉ちゃん、遅くなってごめんね。待たせたかな？」

「ううん、来てくれるだけで嬉しいのに、そんな事全然ないわよ…
…ちよつと濡れちゃったね」

乾いたハンカチで顔拭いてくれる蘭の肩が濡れて服とひつついて
やがる。……なんだよ、濡れてるのは、オメーもじゃねーか。待っ
てる間も雨に打たれてたんだろ？

「ねえ！ 自分の身体拭かなきゃ、風邪引いちゃうよ？」

「私、身体強いから平気よ！ 今更私の身体拭いたら、湿ったハン
カチで折角来てくれたコナン君迎える事になるんだから」

「そんなの、別にいいのに。蘭姉ちゃんは、もうちよつと僕に頼っ
てくれていいんだよ」

いつも、周りに心配かけまいとして、平気だと強がってても本当は影で泣いてんの、オレは知ってるんだよ。悲しい思いしかさせてない歯がゆい気持ち、分かってるのか？ それでも、工藤新一はそんなお前が好きだったんだ。

工藤新一は、なんて言い方変かもな。けど、最近はオレもどうにも.....

「蘭姉ちゃん！ さっさと帰ろう。僕お腹すいちゃったよ」

「そうだね。じゃあ、今日は腕を振るっちゃおうよー。今日は、コナン君の大好きなハンバーグなんだから！」

「わーい！ 大きくて美味しいハンバーグ、期待してるからね、蘭姉ちゃん！」

子供っぽく大げさに喜んで見せると、蘭が嬉しそうに笑った。新一だった時に向けられた笑みとは、種類の違うものだ。ま、違っても構わねーけど。今でも変わらず、蘭の笑顔は好きだ。ずっと笑ってて欲しいって、そう思ってたんだぜ？

「任せて！ コナン君こそ、こういう事は沢山甘えてくれていいんだからね？ 可愛い弟の喜ぶ顔が見れるなら、頑張っちゃおう。って、心理が働くの。何だかこんなに長く一緒に居ると、本当の姉弟になれたみたいだね」

明るく言われた言葉が、少し悲しく感じた。”姉と弟”ね.....最近では、蘭もオレでさえも、よくそんな態度と感覚で話す。今もずっと工藤新一を待ち続けている蘭がいて、けど反対にその本人は、どんどん工藤新一を忘れて別人になっていくなんで。んなもん、理不尽以外の何者でもねーよ。

「コナン君？」

「うん、そうだね。蘭姉ちゃんが本当に僕のお姉さんならって、そう思うと凄く嬉しいよ！」

本当に僕のお姉さんなら、だなんて、工藤新一の台詞じゃねーな。オレは、江戸川コナンに、いつの間にこんなに慣れちまったんだ？ いつの間にこんなに、馴染んじまったんだ。

こんな事實は、周りが見ればあまりに滑稽な喜劇だろうけど。オレにとっては本気で辛い。今も、蘭の家までの道を、まるで姉弟のように歩いているんだ。見かけだけじゃない、心まで江戸川コナンに支配されてくオレが。

すぐそこに探偵事務所が見えて来た。今となっては、オレの家である事に何の不思議も違和感も無い。たまらず、歩を早めて彼女の前に出た。

「ねえ、蘭姉ちゃん……」

「え？ 何、どうしたの」

不思議そうな声が後ろから返ってくる。そうだな、オメーは、何も知らずに問いかける術しかもてない。だから、間違っても上から表情を見られる事がないように、傘で深く顔を覆った。

「大好きだよ。ずっと、ずーっと……」

いつまでも、工藤新一は蘭に永遠の恋心を抱いていればいいんだ。だって、嘘じゃなくて、本当に好きだったんだ。待ち続けている間泣かせていた彼女が、ずっと幸せな笑顔に包まれ続ければいいって、何度願ったと思う？ それほどまでに、”彼”は後ろの健気な女が、大好きなんだ。

「……だから、早く帰ってくるといいね！ 蘭姉ちゃんの、好きな

人も」

「う、うん……」

「さ。早く、ハンバーグ作って！ 蘭姉ちゃん」

戸惑う表情と、悲しい声は気づかないフリ。江戸川コナンには、それは癒せないから。オレは目一杯の元気な顔を見せて事務所階段を駆け上がった。そこから後は、ハンバーグを楽しみに机に座る、無邪気な子供を徹底した。

もう、オレが江戸川コナンになってから、一年と……もうすぐ半年ほど経つんだ。前に灰原にも言われた通り、時間の流れには逆らえねーもんだな。オレがどう頑張っても、色んな事が歯止めが利かずに変わっていくんだ。

翌朝の学校は、昨夜の雨で風邪でも引いたのか、四時間目まではぼーっと過ごしていた。事件も立て続いていたから、気持ち的な疲れもあったのかもしれないけど。

「コナン君、大丈夫？ 何か、調子悪そうだよ」

顔を上げると、歩美が心配そうに立っていた。

「あー、うん。平気だよ。ちょっと用が立て込んで、疲れ気味なだけだから」

「ホント？ 哀ちゃんも、心配してたよ？」

「なんで今ここに居ない灰原の名前が出てくんだよ」

先ほど、給食当番だった灰原は、割烹着に着替えて教室を出てい

った。光彦も元太も、気づけば教室に居ない。

「判るもん。哀ちゃんがコナン君の事気にしてるの。歩美も……いつもずっとコナン君の事見てるから」

「え？」

「だって、歩美はコナン君の事なら判っちゃうの。この一年間で、変わった事も」

おいおい、何言い出すんだ？ んな真剣な顔、他の奴等がいねえ時に突然されたら対応に困るっての。まさか……これから告白でもしようってんじゃ？

……変わった事なんて、んなもんねーよ。ない筈だ。

「オレの、何が変わったってんだ？」

「知ってるもん、歩美。コナン君の視線が、いつだって歩美以外に向かってる事。前は蘭お姉さんだった。いつもコナン君上を見てた。でも今は、違うんだよね」

「違わない！ オレは今も蘭の事を……くそつ、否定してえのに、首も口も動かねー。今だって、オレは上にいる蘭をいつも見てるだろ？」

例え、なあ？ 今頭に浮かんだヤツが、蘭じゃなくて、灰原だったとしたって。オレが好きなのは……」

「両思いだもん、歩美敵わないよ。大切なお友達だけど、気づいた時凄く悔しかった。コナン君、どうやってら振り向いてくれるのかな？ 言えば、何か変わる？」

「お、おいおい……」

両思いって何だよ。バーク、どんどん話進めんな。っつーか、何

を言いつつて？

「あのね、コナン君が誰を好きでも、歩美はコナン君が好き！」

「歩美ちゃん……」

ズルイ考えは、この告白さえスルーしたくなかった事。オレは歩美の気持ちを知っているつもりだったから、面と向かって言われたくない気持ちがあったんだ。

実際は、んな事出来るわけねーけどな。歩美の気持ちを知っているつもりだったから、目の前で頬を染めて、涙を浮かべられちゃな。

「いいよ、覚悟出来てるもん。歩美の真剣な気持ち、ちゃんと伝わったなら、コナン君も本当の事言つて！ コナン君は、誰が好き？」

オレが誰を好きか、ね。真剣な言葉には、真剣に答える。探偵としても、人間としても義務だよな。

「ごめん。オレが好きな人は……」

蘭……？ いや、確かに好きだけど。一番浮かんでるヤツの名前が言えねーって、どういう事だよ。でも、もし口にしたら、不変が壊れちゃう。工藤新一は、まだ消したくねーんだ。オレが好きな人は、

「哀ちゃん、でしょ？」

っ！ 灰原……？ なんて、だからここにアイツが出て来るんだよ。なんで、そんなに確信めいてんだよ。

歩美がなんで、オレの気持ちを、んな簡単に肯定するんだよ。違う、何か言い返さねーと。くそっ、考えが上手くまとまらねー。

次第に、廊下が騒がしくなってきた。もう、給食が運ばれて来る頃か。

「皆、戻って来ちゃったね。……ま、いいや！ 歩美の事だったんだから、絶対素直になつてね？」

何も言えないなんて、なんて情けねー事だろうな。少なくとも歩美は、壊れるのを覚悟で告白してくれたんだってのに。あんなに、泣きそうな顔で、声を震わせて。それでも素直になれって言うてくれてんのに。オレは、素直になれんのか？

給食中も、五時間目も、小林先生の話なんか全く聞こえちゃいなかった。魂が抜けたみたいにはーっと過ごしていた一時間半程。何やってんだろうな、オレは。

どれ位机に突っ伏していただろう。帰りの号令がかかり終えた教室に、ガタガタと椅子が動く音を聞いた。

もう、下校時間か。これから帰って蘭の前で普段どおりの江戸川コナンを……って、自信ねえなー。なんでこういう事に弱気なんだろうな、オレ。

帰りたくねーけど、何か寄り道する事無かったか？ あ、そうだ、図書室。こないだの事件の被害者宅にあった本調べたかったんだよな。

「悪いけど、先帰っててくれねーか？」

お、予想通りの反応。がっかりしたような、むくれたような、そ

んな顔で反論する探偵団達を何とか宥めた。

オレが教室を出る前、灰原の声が「私も用事があるから」と奴らに伝えているのをぼんやり聞いた。けど、用ってなんだ？ 程度の意識で図書室に直行した。

うげ。判つてはいたけど、随分本も棚も多いねえ。自分ちの本か、推理小説なら一発で見つけられる自信あるけどな。ジャンルは知らねーし、タイトルもうる覚えなんですけど。つまり、アレか。本棚の端っことからそれっぽいタイトルが目映るまで歩く。

えーと。こっちの棚の上から。う。ダメだ、頭痛え……やっぱり、帰りにーかも。今日はあんまり体調よくねーし、探偵団の奴らと素直に帰るときやよかつたな。でも、そもそも歩美が余計な事言うからいけねーんだよ。

「オレが、灰原を好き……ってか？ 言いたい事いいやがって」

ああ、そうだよ。そうかもな。あまりに穏やか過ぎる変化で、自覚するには時間はかかったけどな。いつからだっただろうな。気づいて、オレはすぐに封印したんだ。

蘭を、泣かせたくない。それに、自分がコナンに染まりすぎた気がしたのがやたら怖かったんだ。

「もし封印したまま忘れる事が出来れば、またオレは蘭の所に帰れる筈なんだよ」

ずっと笑顔で居て欲しいと願う。ありきたりと言われようが、そ

れが”オレ達”の願いだ。それだけは、何があっても不変なものだと、自信をもって言える。

あーっ、くそ。作業が捗らねー。頭がはっきりしない時にする作業じゃねーな、コレ。おっちゃんの声で、目暮警部に確認してみっか？

もう諦めて帰るか。そんな結論に達したオレに、突然後ろからクルルな声が降った。灰原……噂をすればなんとやらってヤツか？でも、丁度いいかもな。

「事件に使う資料なんだ。オメーも一緒に探してくれたら助かるけど」

「はいはい。いいわよ、最近の名探偵さんの助手も楽しくなって来たし」

「助手じゃねーつつつてんだろ。オメーは、恋人にでも昇格させてやりゃ満足か？」

あれ？ 冗談言っただけだよな、オレ。口にして、心拍数がやけに激しくなったのも束の間だ。目の前で灰原が冷ややかな笑みで笑ってくれたから、すぐに冷静に戻れた。コレだ、オレと灰原の一番ベストな関係、ベストな距離感。……なんだ、ちゃんと判ってんじやねーか、オレ。

最初から、灰原に手伝わってもらえばよかったんだな。涼しい顔して簡単に見つけやがって。いや、実際感謝したけどよ。これで、やっと事件も解けそうだし、ラッキーかもな。勝手に頭痛とめまいしただけ損か。校門でもクラクラ……って、本にそんな拒絶反応は

初めてだよ。

今、隣には灰原がいる。コイツから帰りを誘ってくるなんて、随分珍しい事があるもんだな。雪でも降るかと思っただけど、道の途中まで来て、灰原がらしくない事をしみじみ言い出した。コレが雪の代わりか。あー、調子狂う。オレ達の歯車も、どこか一つ狂った。

「一年も経てば、考え方も変わる」

何、言ってるんだ？ オレ。ついに体調不良と暑さでおかしくなっただか。いや、灰原があんまりオレを不変だって言い張るから。変えたのは、オメーだってのに。

珍しく、動揺した顔なんかするから、オレだって止められなくなるんだよ。止められなく……

「オレは、お前の事が好きだ」

オレ、今勢い任せに何言った？ しまった、なんてもう遅いだろ。あ、灰原が真っ白に固まってる。それとも、オレが固まってんのか？ 最悪だ、感情に流されて自分から大切なもんぶっ壊しちゃうなんて。今日は、大凶だな。朝、休んじまったらよかった。

いや、違う。これは冗談だ……オレが、最初に灰原にそう条件づけただろ？ そうだ。まだ、リセットできる。

「……………友達として。仲間として。大好きだ」

絞り出した苦しい付け加えが、やけに掠れちまった事に、オレはまた一つ後悔した。

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

FILE 01: 『動揺と変化』 (後書き)

作者より

というわけで、一話目の投稿です！お読みいただけて嬉しい限りです(^ - ^ *)

ていうか、ね。基本的に一人称は加減が曖昧で相当苦手なので、せいぜいプロローグにでも入れる以外は手をつけたくは無かった、のですが。

コナン視点からの裏を描く、というお話なのに一人称以外で書くのはおかしな話でしょう(^ - ^ ; ;
でも、新しいことに挑戦するのは、反応が恐ろしい反面大好きな事ですv

なので、びくびくしながらもそんな形で最後まで^^ ;

さて、コ哀小説と言いつつ、スタートは蘭とのシーン、その次は歩美とのシーン。

こらこら、と思われるかも知れませんが(笑)

でも、これが後に哀ちゃんとコナンが結びつくための重要な部分になるので外せません><

とりあえず五話構成です。(だって、十話も見せられたらいい加減たままないでしょ^^ ;)

ただ、単純計算で二話分の裏を詰め込む形になるので、一話一話はエピソードを除いて長めです。

投稿前に確認しますが、基本後はこの作者より欄を書いて投稿するだけなので、目指せ毎日更新 五日で完結！

お付き合いいただけたなら幸せですv

FILE 02 : 『平和とけじめ』

「ただいまー」

「おかえり。つて、コナン君顔赤いけど大丈夫？」

こつちを見るなり、突然駆け寄ってきた蘭に驚いた。額に触れた蘭の手が、冷たくて気持ちいい。

「やっぱり！ 熱あるじゃない」

「へ？ 熱？ いや、顔が赤いのは……」

熱って急に言われてもな……確かに、言われて見れば、朝から調子悪かったのは認めるけど。でも、この不調は、告白騒ぎが大方の原因なんじゃねーのか？

「もしかして、気づいてなかったの？ 結構熱いのに。朝からちよつと気になってたけど、今日に限って遅くなるなんて」

「そ、そうなの？」

「昨日のお迎えが原因でしょ？ 私がちゃんと気づいてあげてれば……とにかく、着替えて早く寝て。体温計、判るよね？」

浮遊感。あまりにも蘭が軽々抱き上げるもんだから、一瞬宙に浮いたかと思った。なんで運び込まれたのが蘭のベッドなのかなんて事はこの際どうでもいい。ただ、てきぱきし過ぎてねーか？ んな張り詰めてここまで手厚く看病してくれんのは、そりゃ嬉しいけど。蘭が責任感じる事ねーのによ。

「……ねえ。蘭姉ちゃんのせいじゃないからね？ 僕が自分で撒いた種なんだ。今日は学校で、色々あったから」

「色々つて、何があったの？ 相談に乗るから、よかつたら話して」
いつでも聞く準備は出来てるつてか。んな事、言えるわけねーだろ。今ベッドの横にしゃがんで相談に乗ろうとする姿が、同い年の幼馴染じゃない、歳の離れた姉みたいに見えるその事が、一番の悩みだなんてよ。

「……大丈夫だよ。ちょっとした気持ちの問題なんだ。最近忙しくて疲れ気味だったから、吃驚して動揺してたら、知恵熱でもでたかなーなんて」

「そう？ でも、それじゃあどつか特に具合悪いところとかはないのね？」

「うん、寝たらすぐ治ると思うよ」

実際、言われないと気づかない位大した事ねーんだからな。安心したように柔らかく笑って立ち上がる姿に、オレ自身ほっとした。

「そっか、明日学校行けるといいね。早く元気になるように、卵粥作ってあげるからね」

卵粥、灰原に作ってたアレか。うまそうだったし、たまには悪くねーな。蘭の奴、鼻歌歌いながら、随分楽しそうに料理してやがるみてーだし。

ここはどうにも落ち着かねーな。一年も経ってるっつーのに、机上の写真立ては、トロピカルランドのオレと蘭のワンシーン。オレも随分楽しそうに映ってるもんだな。あの日からずっと、こんな身体だつてのに。

「そう。オレが待ってて欲しいって言ったから、あいつはふっきる事もしねーでずっと待ってたんだ」

前より、蘭への電話も少なくなった。けど、蘭は前みたいに愚痴を零したりもしなくなった。ただたまに、寝静まった時間トイレにでも起きると蘭の部屋の電気がついてて、覗くと寂しい後姿がある。手に写真を持って、扉の隙間から聞こえるすすり泣く様が、オレにはどうにも辛くてならない。オレに変わらないのは、蘭の幸せを思う気持ちだけだ。

「でも、オレは、何も変わらずに居たかったんだ。裏切れねーよ、あんな別れをしたまま」

アイツがオレを忘れて吹っ切る時が来るまでは、例え何を犠牲にしても。オレのせいで泣いてる姿なんて、嫌なんだよ。

「コナン君、卵粥出来たけど、どうする?」

「あ、んー、もうちょっとしたら食べようかな」
「判った」

お、美味そうなニオイだな。今夜はたっぷり卵粥でも食べて、さつさと治さねーと。

蘭の奴、翌日学校だったのに、ずっとオレについてたのか? 明け方目が覚めた時、額にのったタオルが冷たいままだったのには驚きだ。

「しっかし、暑い日だな」

いや、熱は下がった。ただ、なんだよこのじりじり来る蒸し暑さ。室温計、と。はあ!? 三十三度って、まだ七時だぞ? 今度は熱中症にでもなれば満足かよ。

「外はもつと暑いだろうな」

家を出たオレはつい顔を顰めた。うぜー暑さに、せみの声。やってらんねー。

合流した灰原は、いつもと変わらないみてーだ。そうだよな、んな言葉意識するタマじゃねーよ。灰原がそんなだから、オレもいつも通りでいれる。登校中も、授業中も。昼休みが終わるその時まで。

昼休みもそろそろ終わりって時、歩美がまた話しかけてきた。悪いけど、ほとぼりが冷めるまでほっというて欲しいんだがな。

「今日は何？」

ほら、つい口調が荒くなっちゃう。しかも、言い辛そうに顔赤くして目泳がせたその反応、やっぱりまたあの事だろ？

「えっ、と……その。コナン君、今日はやたら哀ちゃん的事見てたよね」

「そうか？」

そら来た。判るような態度見せたっけな。意識しねー様にむしろ気遣ってたつもりだったけど。

「うん。だから、もしかして、何かあったのかなーって」

……コイツにぎこちなく映ったなら、そうかもな。全く、ガキのくせに無駄に鋭いとこ、何とかなんねーのかね。もういいや。

「灰原に、告白してみた。オレは、お前の事が好きだってはっきり

と」

これがコイツへの誠意。はっ、驚いてるって事は、そこまでは予想してなかったか？ そりゃそうか、オレも信じられねーしな。こんなにズバツと言っちまった事も、歩美より何故か冷静なオレ自身も。

「歩美ちゃんが、アイツとオレが両思い、みたいな事言うからさ」
「……そっか、言っちやっただ。ついに、言っただね、コナン君」

……随分、動揺させちまったか？ 当たり前か。はっきり頷いたオレ自身、まだ気持ちの整理がついてねーんだ。窓を開けてそこに寄りかかると、わーわーはしゃぐ声がそんな動揺を解いた。
数秒、沈黙。

「歩美の想像、やっぱり当たってたんだよね……」

ああ。悪いな、歩美。確かにオメーは、鋭さがなければ傷つく事も少ない部分に、よく気がつくヤツだ。

「ホント、歩美ちゃんの鋭さには、たまに凄く驚かされるよ」

苦笑して、肩をすくめた。ゆっくり俯く歩美の表情は、上手く読めねー。

「驚いてたでしょ？」

「そうだな……」

いつもからじゃ到底想像できねーような反応だっけ。驚いてるっ

「つか、困惑してるっつか。ああ、くそ。あんまりはつきり思い出せねーな。」

「けど、冗談って事にしたから」

「そっすだよな。どうせ、告白っつっても昨日限りのもんか。」

「ど、どうして!?!」

「色々あって、簡単にはいかねーんだ。……冗談で済ませたかった」
「そんなのないよ! だって、コナン君は歩美の事……っ」

え、ちょ。泣く? 目が潤ん……ダメだ、ここで手を差し伸べたら、逆に傷つけちゃう。約束してたんだもん。本当はもっと、素直になればよかったんだ。

「ごめんね、歩美ちゃん。オレだって思うよ。もしもって」

「何で? 怖いのか? 伝えた後の事が?」

「ちょっと違うけど、それもあるかな? もし、アイツがそういう態度見せていたら……オレには、何があっても、裏切れない人が居るんだ。だから」

蘭の事がなければ、冗談になんかしねーよ。でも、守りたい笑顔の方が伝えたい気持ちよりでかかったんだ。それに、蘭への思いを捨てたと同時に、工藤新一を忘れちゃう事も、怖かった。そんな根性なしなんだよ。

「裏切れない人……それって、歩美よりも大切な人? 誰よりも?」

「そっすだね」

けど。それでも、もし灰原があの時、オレの事が好きな素振りを

見せたりしたら、冗談にはしなかったかもしねーけど。

「それがコナン君の、けじめなの？」

んな張り裂けそうな顔すんな。もう、どうしようもねーのに。

「……けじめか。そんな言葉も当て嵌まるな。こうやって、歩美ちゃんにそれを話しているのも」

つけなきやいけねーけじめは沢山あるんだ。蘭には、待ってて欲しいって言った。でも帰れずに、ずっと泣かせ続けて来た。そして、目の前の歩美は、こんなに傷つける事になった。全部、オレのけじめだ。だから、オメーが泣く事じゃねーよ。

「歩美はそんなのやだよ。そしたら、歩美の告白はなんだったの？」
「ごめん。それでもダメなんだ。どうしても、オレは……」

丁度よくチャイムが鳴って、会話を折られた。沈黙したまま数十秒。

……気まずいな。本鈴が鳴るまでまさかこうやって二人で向き合ってたのか？ どうやって会話再会すりゃいいんだよ？

オレの考えが杞憂に終わったのは、それからすぐ灰原がトイレから帰って来たからだ。けど、よりによって最初に来たのが灰原とはな。尚更気まずさが増したが、クラスの中が騒がしくなるまで、さほど時間はかからなかった。

いつもは穏やかな筈の下校時だったのに、こんな思いはオレだけ。後ろに居る灰原と歩美の会話が気になってしょうがねー！ あーっ、なんで聞こえねえんだ。余計な事言ってるねーだろな。ぴりぴりした雰囲気は気のせいかな？

「だって、歩美はこんなにコナン君の事好きなのに、かなわないんだよ？　なのに、気持ちを通じ合える二人は、誤魔化してばかり、気づかないふりしてばかり！」

え、ちよっ……。はあっ！？　待て、マジで何話してんだよ。

歩美が突然大声を上げたせいで、その台詞だけは聞こえちゃった。落ち着け、冷静になって推理しろ。こういう話になる事が考えられる前後の会話の流れつつたら。おい、まさか歩美の奴、本当に灰原に！？

「珍しいですね、何があったんでしょう？」

「歩美があんな声ですごむの、初めて聞いたぞ」

耳打ちする元太と光彦に、曖昧な返事を返すしかない。なまじ、オレの話で口論になったのはよく判ったから、申し訳なさ半分って所だな。あー、くそっ。一体何の話だよ、後ろの二人！

いつの間に、二人きりになっちまったんだろ。歩美達が居たさっきまでと違って、前を歩く灰原の沈黙にビクビクさせられていた。せめて、リフティングでこの場を繕おう。灰原との別れ道も近いんだ。ほら、あとちよっと。その角を曲がれば……ようやくこの空気が逃げられるんだ。

逃げて、いいのか？　歩美とコイツが口論したのって、元を辿ればつまりは……

「なあ、オレのせいなのか？」

……あ、呼び止めちまった。前を歩いていた灰原の足がぴた、と止まる。これでもう、話を進める以外の道はねーんだな。くそ、こつち向け。後姿じゃ表情が読めねーんだよ！ いや、落ち着けオレ。

「その……もしかして、オレが言った事、気にしてんのか？」
「えっ？」

大きく開かれた灰原の瞳が揺れてる。そっか、やつぱりオメー動揺してんだな。やつと判った。んな目されたらな。昨日の告白も、まさか顔や態度に出さないだけで、本当はコイツも。もし、そうだったとしたら。

「歩美から、何聞いたんだよ？」
「何でもないわよ。ただ、素直になれって言われたわ」

仕草は、少なからず気持ちの揺れを映している。なら、オレも本気になるしかねーのか？ ……あー、くそ。昨日のオレって最悪だ。逃げたいあまり関係ない話しちまうオレも同じ位最悪だけだよ。

「突然あんな事言っつて悪かったな。どう思った？」

何だ？ この下らねー質問。そら見る、灰原だつて不快そうに顔しかめてる。

「どつつて……」
「ないと思うんだけどよ、歩美が……オメーはオレの事好きなんだつて」

まさか。いや、ありえねーよな。

「そう、なのか？」

すぐに、冷笑と一緒に「バカね」とか茶化してくれるもんだと思つてた。けど、十数秒程沈黙している様子は、茶化すにはかかり過ぎだ、よな？ 早く、何とか言えよ。バーク。

「バカね。小学生の女のカンを信じるの？ 平成のシャーロックホームズさん」

「やっぱり、気のせいだよな……？」

ホラ、な。呆れ顔で溜め息混じりに、ちゃんと否定してくれた。

「そうだったら、どうするの？ 私が、もしあなたを好きだったとしたら」

頭が真っ白になったのは、一瞬だ。……待てよ。さっきのは、否定だったんだよな？ オレの事はそういう対象じゃない。そうだろう？ ああ、でも。

「……それならそれで、オレは別の答えを出さなきゃいけないのかもな」

「どんな答え？」

「さあな。でも、どんな道に進む事になっても、無碍に出来ない存在が居るんだ」

例え、告白が冗談とは全く違った意味を持つちまつたとしても。灰原がもし、オレの事を……なんて事があつたとしても。自分自身に釘をささねーと、タガが外れそうだ。

「……知っているわ」

え？ まさか、本当に歩美の言う通り？ 灰原が、オレの事を？
いや、そんな筈は……でも、そう思わないと、他にコイツの態度は説明できないよな。そうだとしたら、オレが今何か言わねーと。ダメだ、口を開く度に言う言葉が頭の中から消えてく。灰原がふつと微笑むまで、オレはただ金魚みてーに、ぱくぱく口を動かすだけしか出来なかった。

「悪いわね、いい加減立ち疲れたんだけど。そろそろ、帰らせてくれない？」

「あ？ あ、ああ、そうだな。げ、悪い！ 三十分もここに居たのか」

「そうよ。大した用でもないのにこんなに足止めされるなんて、驚いたわ」

あ？ 大した用でもないだと？ コイツ、人がどれだけ……

「そもそも、オメーが意味深な質問返さなきゃ一瞬で終わったんだよ」

「はいはい。話の続きはまたにしましょ？ ……じゃあね、工藤君」
「お、おう」

灰、原……？

手を振るアイツが最後に見せた微笑。それは、まるで遠くに行つちまいそうな気にさせる。最後の別れの言葉も、何だかヤケに意味深だ。けど、オレは呼び止める理由も浮かばねーまま、見送る事しか出来ねー。自分の悪い予感を、信じてればよかった。

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

FILE02：『平和とけじめ』（後書き）

こんばんは。思ったより遅くからの作業開始となっ
てしまいました。><（ゴメンネ、色々まだ浅く読ませ
て頂いてるだけなので、レス関係明日以降：反
応いただけ嬉しかったですv）

二話目です。一人称は恥ずかしいシリーズ第二弾
（苦笑）

出す、と決めたのに読み返すと出す決心が薄れ
てしまう効果があるようです（^ー^；

書いてた時本当に思いました。色んな意味での
境界線の難しさ。加減の難しさ。

稀に、なりきりすぎて暴走しそうになる恐ろ
しさ^^；

実は、三話目までは三人称で書いた文があり、
それと見比べてはぐぬう、です（笑）

でも、恥はこの際捨てましょう。毎晩更新を
お約束したのですから。もう書き止まったも
んは仕方ない。

というわけで。

本編第二話、『日常と平和』第三話『気持
ちとけじめ』に当たる時間軸です。

お楽しみいただけたら幸いですー><

FILE 03 : 『別れと薬』

テレビに映るのは、ただ見て面白く笑うだけの娯楽番組だ。ワンシーンワンシーン、どっと笑う声がテレビから聞こえるが、今日びのお笑いつてのはよく判らねーな。何が面白えんだか。下らねーほどいつも通りの夜。そんな中、オレは蘭と二人、今日も捜査中のおっちゃんを覗いて夕飯を食っていた。

「昨日の卵粥もハンバーグもだけど、やっぱり蘭姉ちゃんの料理美味しいね！」

「そう？　ありがとう。ほら、まだあるから沢山食べて！」

頬を赤らめて、嬉しそうに勧めてくる。山盛りの肉じゃがとコロッケは、二人分つっー量にも見えねーけど、予想外に食が進む。これで丁度四つ目のコロッケに箸をつけた。英理さんの殺人的な料理と違って、蘭の手料理はどれもうめえからな。

「蘭姉ちゃん、そう言えばさ……最近は学校で何か変わった事あった？」

オレだってあん中の一員だったんだ。今日はそんな他愛ない会話だけで過ごしたい。

「うーん、そんなに変わった事ないけど。そうそう、そう言えばサッカー部！　コナン君も一度会った事あるでしょ？　中道君たち」「え、うん！」

サッカー部の話か！　つい嬉しくて、テンションが上がる。途端、蘭が怪訝に首を傾げた。ああ、やべ。意味もなく声を弾ませちまっ

た。

「何か、嬉しそうね。コナン君」

「そ、そんな事ないよ。それで、中道……えと、そのお兄ちゃん達
がどうしたって?」

「う、うん。実はねえ」

アブねー。コナンがテンションあげる話題じゃねーな。

サッカー部が県大会を勝ち進み、惜しくも決勝で敗れたが全国行
きの切符を手にした。興奮気味に声高く話すオメーと一緒に、ここ
は興奮してもいい所だろ?

「全国つて、凄いじゃない! 新一兄ちゃん、羨ましがると思うな」

まあ。オレが居れば、準優勝なんかじゃなくて、優勝で全国行き
手に入れた自信はあるけどな。……オレも未練たらしいねえ、サッ
カー部は自分から辞めたんだろ。

「でしょー。新一もサッカー部に居ればねー、でも多分仲間が勝ち
進んだつてだけで喜ぶと思うの! 直接電話で伝えたいからメール
もしてないけど」

「あ、うん。そうだよね、やっぱり嬉しいよ! いいな、僕もいつ
かそんな場所でプレーしたかった」

「したかったつて、どうして過去形なの? 変なコナン君」

「あ、いや……アハハ」

またやつちまった。蘭も怪訝さを通り越して、疑いの眼差しじゃ
ねーか。どうも、工藤新一中心の話題になると抑えきかねえな。

柔らかく微笑んだって事は、誤魔化しがきいたか?

「そうだね、コナン君ならできるよ！ 新一だって、コナン君と同じ年位の頃はそこまで上手くなかったもの。凄いサッカーの才能あると思うのよねー、一体いくつからやってるの？」
「え、えーと。ずっと小さい頃かな？」

ハハハ。まさか、小学生の頃からやってるとは言えねーだろ。

「うふふっ、そうだよ。あれだけ上手いんだもん。じゃあ私、コナン君が将来プロチーム入りする事になにか賭けちゃおっかな」

……蘭が笑い出す前の一瞬、悲しい顔は、気のせいかな？

「大げさだなー、蘭姉ちゃん」

「だから、どつかのバカみたいに辞めちゃダメよ？ 勿体無さ過ぎるもん」

ほっとけ！ ……んな寂しそうな声出すんじゃないよ。

確かに、それもまた一つの未来だ。そうすれば、体が縮められる事もなかった。蘭と新一は平凡だけど少し普通の人より栄光を掴んだ道を歩んで、二人でゴール。そうなれば多分灰原とも会えずに、アイツは多分ずっと組織の中に居た。今もシェリーとして活躍し続けた。んな事が、最善の未来なわけねーんだ。

いつの間に、自分の世界に入り込んでたらしい。顔を上げた前に居た蘭が、きょとんとオレを見つめている。

「コナン君……？ どうしたの、もうお腹いっぱい？」

「あ、ううん。ちょっと考え事」

蘭と二人で、アイツと関係ない話をしていても考えちまう。来るべき別れが近づいてるって事か。オレはもう、末期的だ。どんなに

頑張っても、もう戻れねーんだな。そんなら逆にすっきりしたぜ。
明日、灰原に会ったら……今度こそ本当の気持ちで向き合おう。
冗談になんかしねえ。真実を求め続けるのが、探偵を選んだオレの
宿命さだめなんだ。その日は、早くベッドに入った。

オレは、工藤新一を忘れやしない。けど、江戸川コナンとして一
歩踏み出す。そう決意したばかりだった。朝会が終わってすぐ、隣
に体を向けた。

……あれ？ 何処だ、灰原。ぐるーり、教室を見回して、真っ先
に灰原に昨日の続きを……続き、つづき？

「は？ まさか灰原休みか？」

なんだよ、計画台無しじゃねーか。拍子抜けしちまった。そんな
様子がよっぽどおかしかったのか、ぶつと噴出す声が隣で響いた。

「コナン、オメー隣の席だろ。気づくのおせーよ」

うつせーよ。オイ、こら。なんでオメーにそこまで笑われなきや
なんねーんだ元太。ってか、いつの間にわらわら群がってたんだよ、
オメー等！

元太だけじゃねえ。歩美も光彦も、灰原の机を囲って考え込んで
やがる。

「んー……どうしちゃったんだろうね、哀ちゃん」

「後で灰原さんの家に連絡してみるって言ってましたよね」

つい声を荒げちまって、歩美達の視線に緊迫感を帯びさせた事に後悔した。けど、今はそれどころじゃない。

居なくなつた？ 朝、起きたら？ ……アイツ、まさか。

「博士、昨日灰原に変わった様子なかつたか？」

『そ、そうじゃな……昨日は、夕食も珍しくポリウムがあつて。けど、そう言えば哀君は泣いておつたような』

「泣いて？」

『ああ、そうじゃよ。いや、哀君は違つていたが、目を腫らせていたんじゃない』

さーっと冷てー何かが頭から降りた。自分の顔から、血の気が失せる感覚。

灰原は、“何か”の理由でオレと別れたあの後目を腫らす程泣いたんだ。そして、その後ありえねえポリウムの夕食を出した。じやあ、“何か”って、なんだ？ バーロ！ 考えなくても、分かるじゃねーか！ オレとの会話が原因に決まつてんだろ。昨日確かに思いつめた様子だった灰原に、オレは何も言えなかつた！ こんな事になるとも知らねーで！

電話越しに、博士が息を呑む様子が伝わった。

「……いつもより、変に多弁になつてなかつたか？」

『そ、そうじゃな。確かに、よく喋つておつたよ』

最後の会話だと思つてたんだ。気取られないようにと、必死だつたんだ。あれでそういう事には不器用な奴だから、たくさん喋つて気持ちを押し隠そうとしてたんだ！ つまりそれは、“最後の晚餐”のつもりで。

「博士、心当たりに連絡つけてみっから。心配すんな」

『そ、そうじゃな。頼んだぞ、新一君』

電話を切つてすぐ、三人の不安な視線を浴びた。そりゃ、あんな電話の内容じゃあ当然か。

「は、灰原。何かあつたのかよ?」

「変わった様子とか、泣いてた、とか。何の話なんですか!??」

「まさか……昨日歩美が哀ちゃんにきつく言つたから?」

三人纏めてんな必死に詰め寄られちゃ、たまんねえ。真実を話すしかねーんだ。嘘ついて、その場限りの安心をさせたつてしゃーねーだろ。

「灰原が、家出したらしいんだ」

三人共驚くしかねーって所か。絶句してる中で特に、歩美の顔には、絶望すらも見えた。

「私のせいだ……。歩美のせいだよな? ねえ、コナン君。昨日歩美、哀ちゃんに酷い事言つたの。お友達なのに、哀ちゃんの事つっぱねたり、ずるいつて言つたり、嘘つきつて言つたり!」

ぼろぼろに泣く姿が胸に刺さる。全部、元凶はオレだ。灰原が居なくなつたのも、コイツをここまで泣かせてるのも。

「……バー口。歩美ちゃんは悪くねーよ。オレのせいなんだ」

「どうして、コナン君のせいなの?? 昨日、哀ちゃんと喧嘩したのは歩美だよ」

「ちげーよ、その後オレが余計な事言つたんだ。灰原が思いつめたのも気づいてた」

泣きじゃくって、すぐる歩美を抱きしめて包んだ。そう、悪いのは、オレだ。例え、光彦が今にも掴みかかってきそうな目で睨んでたって、嘘なんかつけるかよ。自覚はちゃんとある。他の誰でもねえ、オレのした事だ。

くそつ、オレが蘭とサッカー部の話で盛り上がってる時、アイツはそんな事を考えてたってのか？

「悪いな、けど……絶対にオレが責任持ってアイツを見つげるから」

コイツらとオレ自身に誓う。その先にアイツが居る未来があるように。

お、電話……博士からだ。

『新一、ワシじゃ。さっき言い忘れたんじゃが、哀君の部屋の机に、予備用のAPTX4869解毒剤という小さな箱が置いてあってな、どうやらそれを持ち出してるようなんじゃ』

さつきと違って声を潜めてんのは、薬の話題だからと思う。予備用の解毒剤って、オレが文化祭で一度飲んだアレか？

「持ち出してるって？ なんで！」

『判らないんじゃが、哀君は蒸発してからも薬の研究をするつもりじゃったと思うんじゃよ。フロツピーデータファイルの最終使用日時が、昨日の深夜になっておるんじゃ。一応フロツピーは残ってるんじゃが、どこかにデータごとコピーした形式があつてのお』

アイツ、オレとの約束だけは守ろうとしてか……っ！ 薬が完成でもしたら、ポストにでも手紙と添えて投函するつもりだったって？ 頭ん中を整理しろ。灰原に、行く場所なんて限られてるんだ。博

士の家を出ても、研究に支障がない場所。それを提供してくれて、且つ安心して身を寄せる頼りの存在。

「心当たりは、一箇所だけあるかな」

博士に礼を言っただけで電話を切った。大丈夫だ……行く場所の想像は大方ついてる。

灰原は、帝丹小での探偵団達との生活を楽しんでたんだ。取り戻してやらねーと。オレもアイツと約束したんだ。守ってやる、って。歩美達に、任せると告げて学校を早退した。そうだ、灰原の居場所はこの以外のどこにもない！ だから帰って来いよ、灰原。

FILE03：『別れと薬』（後書き）

作者より

こんにちは（^^）今回もまたありがとうございます〜vv

ええ。今回は、哀が居なくなつてからのコナンという事で。

あんまり重複したシーンを何度も書くのは好きではないので、こんな展開が一番裏らしいですね

でも、もしかしたらーら、案外すぐに再会しちゃうかも？（笑）

レスは、翌朝早いため今全部出来ませんので、とりあえずこのコナンサイド『裏』の評価頂いた方だけ今つけさせていただきます。

（もちろん、表の評価へのレスも、メッセもまた改めてさせていただきます〜^^有難う御座います〜vv）

ちなみに、最初が高校サッカー部の話で始まったのは、それがコナンにない高校生の工藤新一本来であると思つたからです。

いや、だからほら。名探偵としてはコナンもそうだしね。部活仲間と仲よさそうだったし。

それと決別する為に、あるべきお話かなと。

前日に哀と別れたその後から、哀の失踪発覚まで。

次は、大方哀ちゃん搜索編という所ででしょうか お楽しみいただけましたら幸いです^^

次回もまた、よろしくお願い致しますv

FILE 04：『探索と潜入』

絶対に止める。それがアイツの幸せじゃねー事は判っているから。灰原の居場所には、恐らく間違いない検討がついてんだ。だから学校を出たすぐ先で、人が居ない場所を計らって、電話をした。

「あ、こんにちは」

『Hi！ 久しぶりね、Cool kid！』

挨拶した受話器から届いたのは、彼女特有の明るい声。何が「Cool kid！」だ。いつも通り電話に出やがって。何の事かけたか、判ってんじゃないのかよ？

『中々連絡取る理由もなくて、寂しかったのよ。どうしたの？』

「……ジョディ先生、心あたりあるでしょ？ 僕が電話をかけたのに」

「一々まどろっこしいな。無いならないで、用はねーんだ。あるなら、楽しいご挨拶は捨ててさっさと本題に入らせろよ。」

『……そうね。そろそろ、かかってくる頃だと思ってたわ』

ジョディ先生の声が若干低くなった。ここからは真剣な話って事か。……てつきり相当粘られるのも覚悟してたんだけど。でもこれで、灰原の身は保護されてる事になる。アイツを取り戻す事も出来る。

「教えてくれたって事は、接触する許可をくれたも同然だと思って言うよ？ 灰原はどこだ？ 会って、どうしても伝えなきゃならね

「事があるんだ」

灰原が博士の家を出て頼れるたった一つ場所。昔、FBIから灰原に証人保護プログラムの誘いが来た事をオレは知ってる。アイツが頼っていける場所なんて、そこしかねーって事も。

でも、もうすぐだ。ジヨデイ先生が教えてくれれば、今からアイツに会える。絶対に説得出来る。だから早く、教えてくれ！

『無理よ』

へ？

なんだよ。今、なんて言ったんだ？

受話器から聞こえた冷たい響きに、オレは自分の耳を疑った。会わせてくれる気があるから、あっさり認めたんじゃねーのかよ！

「どついう事なの、ジヨデイ先生！ 先生なら、こつそり会わせてくれるって思ったのに」

灰原が証人保護プログラムを断った時も、応援してくれたたつて話に聞いてたジヨデイ先生なら。説得する猶予をくれるんじゃねーのかよ？

『ごめんなさい、誤解しないで欲しいの。あなたが思ってるように、私達があの子を保護していたなら、あなたに会わせる事もしてあげたと思うわ』

”私達が保護していたなら”？ ちよつと待て、どついう意味だよ。灰原はFBIに……

『……確かに、彼女は私達に連絡をくれた。やっぱり証人保護プロ

グラムを受ける事にした、あなたや博士に教えると止められるし辛くなるから、深夜に駅で待ち合わせしたいって」

「じ、じゃあ、灰原とそこで合流したんじゃないのか？」

『シユウと私と、他数名の事情を知ってる捜査官とで駅で待機していたの。でも、結局彼女は来なかったわ。周辺も探したし、彼女にも連絡を取ろうとしたけど携帯は切れていたみたいね』

ざつと背筋に冷たいものが触れた感覚。

待てよ。つまりそれは、どういう事だ？ 灰原は、自分から深夜の駅で待ち合わせと提案して、言ったように博士の家を深夜遅くに出て、けれど駅には姿を見せなかった？ そのまま、姿を消した？ その辺りを探しても、手がかりが掴めないって？

「ハハ、じゃあどういう事だよ！ 灰原は待ち合わせ場所の途中で、何かに巻き込まれて姿を消した！ 誰かの手にかかって、居なくなっただって事か？」

『そうね、そう考えるのが一番自然ね』

「ふざけんな！ 深夜の、んな遅い時間だぞ。なんで、女子供の灰原一人で駅まで歩かせたんだよ。気利かせて迎えに行くのが普通だろ！？」

つい、声が荒らぐ。落ち着け……今更ジョディ先生に怒鳴っても仕方ねーだろ。けど、間違った事は言っただろよな。もし、もしもFBIが車で灰原を迎えて、保護してくれてたなら！

『……………ごめんなさい、彼女が迎えはいって言ったの。それでも、行くべきだったわね』

小さく謝る声がすっかり耳に届いて、ようやく冷静になれた。今更責めても、時間は戻せねーんだ。灰原に初めて会った時、アイツ

に怒鳴ったオレと何の進歩もねーな。

『でもね、争ったような痕はどこにも無かったわ。血痕のようなものも、今の所どこにもない。だから、多分彼女は何か薬で後ろから襲われたか、あるいは』

「あるいは、自分からどこかに消えたか、って事？ ジョディ先生、約束破ってまで、アイツに行く場所はないと思うよ？」

『実は、小さな少女が、駅とは違う方向に、一人でふらふら歩いているのを何人かに目撃されてるの。前に歩いている男の後を追ってるみたいだったって』

「って事は。まさか、組織の！？ ……ハッ、考え過ぎだろ。アイツが組織に居た頃の知り合いを見かけたからって、後つけるような奴か？ 身を隠す、それが唯一自分を守る手段だったんじゃないか。」

「その男の特徴って判るの？」

『ええ、暗いからよく顔までは判らないらしいけど、闇に溶け込むような色の服を着た、かすれ声の訛った男らしいわ』

闇に溶け込む色、奴等の黒服か。

「訛ってるって……どこかの地方訛り？」

『さあ？ それは判らないけど、彼が組織の人間だとしたら、やっぱり』

……灰原は、組織の手にかかって？ いや、違う！ 今わかってるのはそれが灰原かも知れねーって事と、そうだとっても奴等にはまだつかまってない可能性もあるって事だ。

「判った！ 僕も独自にアイツの事探すから、何か判ったら連絡と

りあう形がいいよね？」

『そうね。そつちも何か判ったら連絡くれる？』

「うん、もちろんだよ」

何があつても、灰原を助け出してみせる。アイツに運命から逃げるなつったのはオレじゃねーか。もう、オレも絶対逃げたりしないんだ。

捜し始めたその日は殆どの手がかりがつかめず、せいぜい判つたのは、灰原らしき少女が最後に目撃された場所位のものだった。ようやく話が動いたのは、丁度翌日の午後の事だ。

「ねえ！ 本当なの？ ここに泊まった女の人！」

「はい。その写真の女の子に瓜二つの顔と髪的女性が、一昨日から二泊されていきました」

ようやく掴めた！ 最後に灰原を目撃したと言われた場所の近くのホテルで、順に写真を見せて探っていた七軒目のヒットだ。ったく、都会つてのは随分宿泊施設が整つてやがる。

「で、今日チェックアウトしたんだよね？」

「え、ええ。まだつい先ほどの事です。出る時は、随分と印象の違う服装や装飾品を身につけられていましたが」

「教えてよ！ どんな格好だったのか」

戸惑い交じりに話す受付の人から聞いた格好は、確かにアイツの

イメージと違う。それにしても、まさかアイツが大人の姿になるとは思いもよらなかつたぜ。この従業員さんが灰原哀の写真で反応してくれたからよかつたようなもんだ。でも、どうしてんな格好で。……灰原は、誰かに変装しようとしていた？

「あの、ここに来たその人が、今日チェックアウトするまでの行動を出来るだけ教えてください！」

「構いませんが……本当にそれで坊やお探しの方が見つかるのですか？ その女性の妹さんを探しているのですよね？」

「うん、だからそれは話聞いてから！ その子、早くしないとそのお姉ちゃんも一緒に一家心中しちゃうかも知れないんだ」

こんな子供一人で言ってる事なら、信じてなぐれねーだろうけど。そこにFBIが絡んでるとあっちゃ、信じざるを得ねーだろ。

両親がFBIに追われている少女が、最後に救いを求める電話をしてきた。予想外の展開に急遽作ったストーリーだが、動転しているホテルの人を騙して、口もふさぐには充分だったみてーだな。

昨日の夜外出した灰原は、一時間かけて帰って来た時疲れ切った顔をしていたという。つまり、片道三十分以内の場所で何かそこまですられる用を足した後、戻って来たって事だな。……大丈夫だ、焦るな。今日の昼まで灰原は無事だった。それが証明されたんじゃないか。

どこに行けば、アイツに会える？ どうすれば、アイツを助けられる？ その答えは、もうすぐオレ自身の手で手に入れてみせる。

「ジョディ先生達に、ココから三十分以内で行けるような場所探して欲しいんだけど」

「ええ、そうね。用を足したと考える時間も頭に入れて、近場から探して見るわ」

「うん、お願い！ コレばかりは…… FBIに任せるしかないから」

そこを探してもらってる間、オレはオレで出来る事をする。そして、灰原を助けるついでに、組織の事も終わらせてやる。

「組織と争う事も考えて、使える人そろえておいてね」

「もちろんよ。今度こそ、彼らを終わらせましょう」

終わらせる。一年以上かかった奴等との戦いを、今度こそ必ず。

ジョディ先生からの連絡が入ったのは、それから二十分後の事。その場所にオレは走っていた。

「ジョディ先生！」

「あ、待ってたわ。見て」

ジョディ先生の指差した先に、黒髪の女性が気を失っている状態で拘束されていた。思えば、先ほど聞いたチエックアウト時の灰原の服装や装飾品がよく似合いそう。体格や顔もそこそ似ている。実際、耳や手にアクセサリをつけてた後がついてるじゃねーか。

「アイツは、この人に変装した？」

「.....そうになると、彼女をココに監禁したのはあの子って事になるわね」

「昨日の夜、灰原はホテルを出て彼女を薬なんか使って監禁したんだ。そして、身ぐるみを剥いで、今日彼女の格好で」

行く場所は判ってる。信じたくはねーけど、奴等のアジトだ。きつと、昨日つけてたって言う男の辿り着いた場所だったんだ。この女は多分組織の一員。くそっ、それがどれだけ危険な事か、判らなかつたのかよ!?

「くそっ!」

ジョディ先生がオレを必死で宥めるが、悔しさと不甲斐無さでいっぱいだ。

耐え切れずに、思い切り壁に打ち付けた拳の音で、眠っていた女を起こしちまったらしい。

「.....何、何よコレ! アンタ達、誰なの?」

「おい! お前、自分を監禁した奴の顔を見たか?」

「顔!? 監禁?そ、そうよ。くそっ、シエリーっ!!」

..... やっぱり、灰原だ。歯をきしませながら地団駄踏む女は、アイツと顔見知りの組織の一員。

「なんなのよ、アンタ達! シエリーの仲間? 私をこんな風に縛り付けて。ふざけんな!」

「FBIの、ジョディ・スターリングよ。あなたはもう私達の手に落ちているわ」

「だから、観念して大人しく話した方が身の為だぜ? アンタが知

「つてる事全部」

「くっそー、こんなガキまでが!?!」

女は顔をぐしゃつと歪め、スゲー形相で睨んで来て声を荒げる。

知ったこつちやねーよ。こっちは危険を承知で素で話してやってんだ。早くしねーと灰原の身が危ねーんだよ。さっさと灰原の居場所を教えやがれ。

「黙ってても、調べりゃ判る事だろうがな。ここからすぐ近い場所にそれがあんのは知ってた。後はしらみつぶしに探してきや……」

なあ、アンタは息を荒くして相当腹立ててるみてーだが、こっちはそれ以上に腸が煮えくり返ってたよ。アイツがどんな思いで今まで頑張ってきたと思ってたんだ! てめえらが何して来たか判ったのか?

「アンタらはもう終わりだ!」

「くうーっ、アンタ何者さ! ガキのくせに、なんでFBIとつるんでシエリーを!?!」

「大切な奴を助けようとするのに、理由が必要か? 言え! どこだ!?!」

この女がどんなに凄もうと、もう知ったこつちやねえ。言う気がねーなら、何をしても吐かせてやる。灰原……もうすぐだ。オレが行くまで無事で居てくれ! 無茶な行動すんじゃないぞ!

オレはまた、走っていた。後ろのFBIの人たちも一緒に。ホテルから二十分ほど離れた施設。くっそー、もう日が暮れそうじゃねーか。問い詰めても吐かないあの女のせいで、余計な時間くっちまった。灰原、頼むから……まだ奴等の手に落ちんじゃねーぞ！

辿り着いた薬品研究所の裏口から、オレ達は扉を破り、強引に突破した。まあ、この辺はFBIの連中に感謝しなきゃいけない。そこからすぐ繋がった廊下の一番奥に、黒い連中がたかつてる。

「は、灰原アー！！」

何だ、コレ。ジンに、知らない黒尽くめの男達に、その中央で銃を向けられて血だらけで倒れてんのは。想像してた大人のアイツじゃない、灰原哀の姿だ。

奴等にこんなにされるまで、間に合わなかったのか！？ 転がったカプセルに伸びた手から、大量に出血して……そんなになるまで、抗い続けたのかよ？

「どうして……？」

顔を上げた灰原が、苦しそうに、弱弱しい声で問いかける。

助けに来るに決まってるんだろ！？ 守ってやるって約束、忘れたのかよ！ バーロー！

なんで、んな血みどろになってまで、まだ薬に手え伸ばしてんだよ？

「説明は後だ！」

プツン、と何か切れて、灰原に駆け寄った。組織の連中が撃ってくる弾にも、間違ったら当たるかも知れねー覚悟で。突入したFBIが必死で守ってくれなきゃ、やばかった。

ぎゅっと抱きしめた体は、ヤケに血と汗で濡れている。ずり落ちた大きな衣服の代わりに、オレの羽織っていた上着で包んだ。早く、コイツを安全な所に連れてかねーと！

「救急車、誰か呼んで！ お願い」

外に出るなり叫ぶオレに、近くの捜査官が慌てて携帯を取り出した。ここまで来れば一先ず大丈夫だ……。

灰原は、この腕の中にいる。どんな形であれ、ちゃんと生きて、帰って来てくれたんだ。まだ、コイツが殺されたかも知れねー事思つと、ドキドキしてる。見る、実際失いそうになったコイツは、こんなにオレにとって大切なんじゃないか。

「もうすぐ、救急車が来るから、頑張れよ！ それまで、オレがついててやつから」

「いいの？ 工藤君……行かなくて」

「ああ、大丈夫。FBIの人たちが踏み込んでくれたし、その中には頼りになる人が居るから」

オメーはそんな下らない心配しなくていいんだよ！ 中の事なら、赤井さんも居るから大丈夫だ、きつと上手いように終わらせてくれる。今のオレは組織より何より、灰原をちゃんと助けられたためくもりに浸る方が、ずっと大切なんだ。

「なんで、何でだよ！ 突然消えるような真似しやがって。そうしたら、オレに何の相談もしねーで、こんな危険な所に一人で乗り込むなんてよ！」

もしも、オメーが永遠に帰ってこなかったらなんて思ったりもした。それなのに、オレの前から、消えたりするんじゃないよ。くそ

！　こんなに心配させやがって。こんなに、血だらけになりやがって！

話している間にも、銃創から血が止まらない。次第に、弱くなつてく声を、必死で繋ぎとめた。

救急車が辿り着くまで、オレはいつまでも灰原の名を叫び続けていた。

FILE04：『探索と潜入』（後書き）

作者より

どうもこんにちは！ いつも有難う御座います！

駆け足調で更新してきましたお話も、次回でラストです（^^）
自分でやってて、自分で早いなぁと思います。

五日か。本当に駆け足ですね。

私のコ哀なんてこれ含め、あともう一つ、永遠にこの場には公開するつもりのないものくらいです。本当に稀なのですが、楽しく描いておりましたv

もしも皆様にも、楽しく読んでいただけたなら嬉しいな^^

……ってか、明らかに一日の一話分の読者数が、託されたモノなど他の連載より多いのですが（汗）しかも、何故かプロローグより圧倒的に第一話が読者さん多いのですが、何効果？

いや、逆ならわかるんだけどさ。（プロローグ>第一話）

というわけで、これを一話分につめる必要があったのか？と聞かれるとちよびつと首ひねりです^^；

手がかりを掴む 哀を探す 見つけて救出。

一話一話、膨らませて細かく入れてもよかったのですけどね。
でも、中途半端な話数にしたくなかったので、五話完結が裏のお話です。

まあ、私的にあの女とのやり取りもうちょっと取り入れてもよかったのかなって思っけど。

さて、哀ちゃんも救出されまして、最終話。

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

大体、どんな展開に行くかは想像されてることかな？^^表との重複シーンもちよびつとだけあります。

と、少しだけ最終話予告をしたところで。

またよろしければ次回も是非よろしくお願い致します (^ - ^*)

FILE 05 : 『最終話〜偽りと真実、そして未来〜』

さつきからずっとテレビに流れているのは、ついこの前オレ達がアジトに乗り込んで検挙に追い詰めた組織の話だ。昨日の事だつてのに、テレビに映る研究所があまり記憶にないのは多分、あん時のオレが灰原しか見てなかったから。

にしても、昼食時から流す内容にしては、随分どす黒い内容だな。そんな事を考えながら、病院の灰原に付き添い、流れるアナウンスの声をぼんやり聞いていた。

「そろそろ、目え覚ましてもいい頃だと思っただけだなあ」

今となつては、病院のベッドに横たわ……寝てるようにしか見えねーけど。ったくコイツ、紛らわしい気絶しやがって。なーにが「ありがとう」だ！ 本当にあのまま死んじまうかと思っただじゃねーか。

確かにコイツを診た先生の話だと、実際出血多量でやばかったって話だが。

「今となつては、目を覚ますのを待つだけねえ……昨日の夜の慌しさか冗談みてーだな」

オレの気持ちお構いなしに、随分と気持ちよくお寝んねしてんじやねーか、なあ灰原。いい身分だぜ、ったく。

お陰で、キスマでしちまったじゃねーか。おまけに死んだ明美姉さんにまで神頼みみてーな事して。かーっ、情けねえ！ あん時のオレはどうかしてたんだ！

「う……」

お、やっと目え開けやがった。ぼんやり周り見回して、一晚中つきそってやったってのに、真っ先にオレに気づけよコラ。数秒間彷徨った灰原の目がやっとオレを見た。目が合っつてすぐ、灰原の顔色が曇る。何だ？

「やっと目え醒めたんだな」

「.....江戸川君。そう、私本当に助かったのね」

ヤケに声が小さく感じたのは、気分のせいも怪我のせいかまではわからねーけど、何助かったってのにそんなに寂しそなんだよ。縁起でもねー事言うなってんだ。人がどんだけ！

「バカね。ふ、本当にいつも私の冗談を真に受けるから、面白いわ、工藤君は」

「じ、冗談なのかよ！」

「ええ、そう。あなたと同じよ、真面目な冗談」

オレと同じ.....？ って、あの事が！？

「私、あの冗談の返事まだしてなかったわよね？」

真剣な目に射抜かれた。なんで、んな冷静に開き直ってんだ？

オメー。どんな返事を、返すつもりで.....

「好きよ、私あなたの事。言っておくけど、友達とか仲間としてじゃないから」

声も顔も、冗談には見えねーな。.....ああ、そうか。やっぱり。灰原の気持ちがオレの中で確信に変わって行くのと同時に、今まで

のピースが一つずつ頭の中で嵌っていった。最低だな、オレ。そんな灰原に、冗談で言っただけで告白して、気持ちを引つ掻き回して。

「……冗談で済ませられたら、楽だったのにな」

「私も、冗談で済ませたかったけど、どうやらそうさせてくれない人が沢山居るから」

歩美ね。オレ達二人して、まだ小一のガキに逆らえねーんだな。

アイツのお陰で今があるってワケか。今なら、オレも素直になれそうだ。

改めて、思いを口にしようとした瞬間、耳に廊下から届く大勢の足音が聞こえて来た……ああ、そろそろ来る頃だと思っただけ。灰原の見舞い。

「……皆来たみたいだぜ。続きはまただな」

ま、いいや。んな焦らなくても、ちゃんとまた伝えてやつからよ。大丈夫だ、今度は絶対逃げねーって、何度も心に誓ったんだから。

「ま、待って！ 私、まだあなたの口から、何もはつきりした事聞いてないわ」

病室を出ようとしたオレを呼び止める必死な声に、足を止めた。

「ちゃんと言っただろ？ オレ」

振り向くと、きよとんと目を丸くした灰原が映った。ふっ、いつもしてやられる仕返しだ。そう、ちゃんと言っただよ。オメーは、覚えてねーかも知れないけどな。

「どっぴう意味なの？ やっぱり、結局冗談って事？」
「.....さあ、な」

オメーに、オレからの謎かけだ。退院する頃までに、しっかり答えを思い出しておけよ。あんなに強く願った、オレの気持ちを。

”生きて、目が覚めたら.....オレに惚れる”

そうしたら、オレが責任もって、オメーを幸せにしてやっから。
なあ、灰原？

色々あったけど、組織が壊滅したあの事件から一年。コナン生活ももう二年と少し.....ははっ、慣れて当然だな。

蘭は、最近何故か工藤新一の話をあまりしなくなった。だからオレも、アイツに電話をかける回数もめっきり減った。

そして、クソ暑いこの残暑の真っ昼間に、オレはいつも通り本を読んで過ごしている。

「コナンくん、電話よ！」
「あ、はい」

玄関の辺りからの筈なのに、静寂は一気にかき消されちまった。榮を手にとって、電話に急ぐ。「はい」と受話器を渡してきた蘭の……ちよつと悲しそうな笑顔。蘭がこんな顔をすると、誰からの電話かわかつちまう。

「よお、灰原」

『江戸川君、ごめんなさいね。携帯が通じなかったから』

ああ。やっぱり、灰原だ。蘭の奴、灰原と最近仲いい筈だけどなあ。携帯、そういやこないだコナンの奴水につっこんじまったっけ。

「あー、悪い。ちよつと今故障中なんだ。で、どうした？ オメーからかけてくるなんて」

『え、ええ……』

途端、やけに詰まった聞き取り辛え声が返って来る。しかもいい所で話をぶつちぎってだんまりしやがって……怖えな、何だよ灰原スウ、と息を吸う音がこつちにも聞こえる。深呼吸しなきゃなんねーほど、言い辛い話って事か？

『私の家に来てくれる？ 早い方がいいわ、出来ればこれから。実は、解毒剤が完成したの』

「え？」

……完成、した？ 待てよ、突然すぎて上手く理解できなかったじゃねーか。ああ、頭が真っ白っつーのはこんな状態だ。灰原がずっと解毒剤を研究し続けてた事は知ってたが、すっかり忘れた頃に

突然かよ。

『江戸川君、大丈夫？』

「あ。ああ」

気遣う声に、ただ放心した返事しか返せねーってのは、何とも情けねえ話だが。アソコまで願った薬が出来たって聞いた時の反応じやねーだろ。

いつの間にかこんな認識になっちまったんだろうな。工藤新一はオレにとつて、大切な思い出だ。”今”じゃねえ。でも、ただの過去でもねえ。オレが黙っているのに合わせる位沈黙した灰原は、ぐちゃぐちゃに絡んでやがるオレの気持ちの全部を見通してんのか？

「悪いけど、突然すぎてちよっと混乱してんだ」

『ええ。でしょうね』

……んな涼しい声で返すオメーは、全くいつも通りだな、オイ。どう思ってたんだ？ オメーにとつても、でっかい事だろ。

『私は、決めてるもの……最初から。何より灰原哀が大切よ』

「……そっか。答えててんだ。確かに、オメーはそうだな。」

ビシッと強い口調で返したのは決意の証ってわけか？ 比べんのは変な話だけど、昔より随分強くなったな、オメーは。それに比べてオレは……

「とりあえず、気持ち纏めてからでいいか？ オメーんち行くの」

『ええ、私特に予定ないから、いつでも待ってるわ』

「そっか、悪いな」

こんな真昼に欠伸なんて、あんまり寝てねーんだろ。徹夜で薬仕上げてくれたつてのに、何考えててんだ？ オレ。灰原がこの薬の為に、必死になってくれてたの知ってんじゃねーか。

『……江戸川君、一つ言っておくわ。』

真剣な低い声？ 今更なんだよ。

『この薬を作り上げたのは、私のエゴよ。宮野志保として最後の仕事をやる為に、完全に吹っ切って灰原哀として生きていく為にどうしても必要だった行程なの。だから、私の努力に遠慮しないで。二年も経つんだから。どうするか決めるのはあなたよ』

「灰原……」

妙にさばさばした声だが、エゴって言葉一つで片付けられるもんじゃねーって事をオレは知ってる。血だらけの手で、必死でたった一粒程度の薬を掴もうとしてたんだ。オレと灰原との、全ての始まりとなったあの薬をな。言わば、あの薬はオレ達の絆、か。

「じゃあな、遅くならねーうちに行くと思うからよ」

「ええ、待ってるわ」

受話器を置いて、オレは数秒立ち尽くした。立ったまま、このちいせえ手を眺めてみたけど、今となっては何とも思わねえ。ああ、やっと判った。ずっと隣で灰原を守ると決めたオレは、もうとっくにコナンだったんだ。

……何だ。もう、オレン中ではとっくに答えが出てんじゃねーか。行くか！

「蘭姉ちゃん、ボクちよつと出かけてくるよ！」

「えっ？ どこに？」

突然んな事言い出したら、慌てるのも無理ねーか。……悪いな、蘭。

「博士んちだよ！ 大事な用があるんだ。遅くなる前に帰ると思うよ」

「そ、そう……」

「うん。……じゃーね、蘭姉ちゃん」

蘭が一瞬悲しい顔をしたのは、見なかった事にしよう。次会う時は、本当にオレ達全く違う関係だな。蘭、身勝手な二年間にしちゃって、ごめんな。

「……さよなら、新一」

え……？ 蘭の咳きはやたら小せえ声だったけど。聞き間違いの類じゃねえ事位判る。玄関から一歩足を踏み出す直前だったが、オレは足を止めて振り向いた。……あれ？ 笑顔作ってやがる。

「どうしたの？ ホラ、待たせてるんでしょ？ ……行ってらっしゃい、コナン君」

打って変わって明るい声だしやがる。けど……オメー、オレの事。

「うん、行って来ます！ 蘭姉ちゃん」

オレもガキっぽく笑ってこう応えんのがベスト、かな？ いつから気づいてたんだか知らねーけど、多分これがオレ達の別れって知ってても、こうやって今笑顔で送り出してくれてんだから。

もう一度、オレは外に出て戸を閉め、灰原と解毒剤の元に走った。待ってるよ、灰原。オレの結論をちゃんと見せてやっから。

……あん時、情けねー位悩んで出した結論が、ずっと今に結びついている。

もうあの組織との対決も、解毒剤が完成したあの日も、随分古い過去の思い出だ。

今思い出しても、随分遠回りしてたと思う。オレは、まだ未熟で幼くて、だから過ちも犯した。けれど、こんな今があるのは、自分に素直になれたからなんだ。

それにしても、この博士んちの玄関で灰原を待ち続けて二十分、か。ハハハ……いい加減、オレもちょっとイラついてきたぜ。なあ？ 随分なめられてんじゃねーか！

「おーい、おせーぞ！ 何やってんだ？」

「し、仕方ないじゃない。博士があれもこれもって」

「ったく、すっかり保護者気分だな、博士も。灰原より張り切ってるんだろ？」

「ええ、その通りね。そのせいで、私が新学期早々遅刻したらたまらないわ」

肩を竦めて話す灰原の姿が新鮮に映るのは、いつもと違う格好だからだ。すっかりピンクに染まった桜の木をバックに、初々しい制服姿が映える。

「似合うじゃねーか。帝丹中の制服も」

「あら、ありがと。あなたも、二度目の中学生をこれから三年間、せいぜい楽しむのね」

「うっせー！ ほら、さっさと行くぞ」

がっしり灰原の手を掴んで、昨日までとは新しい通学路を走る。オレには二度目の中学生生活。コイツと、楽しい日々が過ごせればいい。

「なあ、灰原」

「え？」

「……オレ、ちゃんと約束果たせてるか？」

オレの手に引かれる灰原の顔が真っ赤になって、「ええ、そうね」と小さく頷いたのを見逃すわけがねえよ。コイツ、普段クールなイメージだから、そうやって真っ赤になってみたり、こつ顔を上げてふわつと笑ったりすると、溜まらなく際立つんだ。

「あなたに出会った六年間、たくさんの幸せを貰ったわ。ありがと」

「ああ！ まだまだ、これからもよろしくな！」

灰原の後ろで、明美さんも一緒に笑ってるように見える。オレは幽霊なんて信じてねえけど、ただの幻覚かも知れねえ彼女が、灰原の肩を抱いてる。……よかったな、灰原。確かに姉さんはオメーをずっと見守ってるぜ。

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

こんな、何気ない朝の時間みてーに、いつまでも隣で、笑いあっていたければいい。時に、自分が生み出した偽りの世界に心を惑わされても、真実を追い求めていけるようにな。これからもまた長い時を、江戸川コナンと灰原哀として生きていくんだ。

こんな風に手をつないで、ずっと一緒にな。

FILE05：『最終話〜偽りと真実、そして未来〜』（後書き）

作者より

仕事をして帰ってくると、本当に五日って早いものです……というわけで、改めまして皆様こんにちは このシリーズでは最後のご挨拶となります、朧月ですv

相当駆け足では御座いましたが、ご愛読有難う御座いました〜っv
vv

本編、この願いが届くのならば……の『裏』として書かせていただきましたこのお話ですが、今回でついにラストです。

哀ちゃん側からの謎かけは、しっかり解けていただけましたでしょうか（^-^*）

実は、最後の蘭ちゃんとのほんの二言三言の会話、あれ本当はもうちょっと長かったのです。一話からの蘭の気持ち、全て切なく解き明かそうとも思いました。

そして、別れと共にコナンは笑顔で送り出されて、笑顔で家を出る。（ここだけ名残ですね）哀ちゃんとも仲良くする蘭がそこに繋がってくる、という。でも、やっぱり今回はコ哀だしね、ラストにそんなに蘭ちゃん強調して持ってくるモンでもないなど。

そんなこんなで、今回どちらも『未来』というサブタイトルのキーワードで終わりました。

私の話は、全ての時間軸の中で未来を大切にしているものが多く多いです。そこに行くための過去がある、という考えの元で作っております。

すので。

過去があるから、今がある。そして、今もまた少し未来には、過去になる。

だから、未来を大切にするって言うのは、今をおろそかにする事じやなく今をひたむきに生きるって事だと思っんです。

常に正しくなくてもいい、間違っつて、失敗してボロボロの過去でもいい。そうやって成長した結果の今があるんです。
今、もし苦しいとしよう。

この一瞬必死で頑張った結果、少し先に小さな幸せが待ってて、大きな幸せもまたどこかに待ってるでしょう。逆に、過去に疲れて休憩してる今でも、また頑張れる未来に続くものなのです。

今、暖かく幸せだとしよう。

きつと、その過去にはひたむきだった事でしょう。

だからね、凄くシリアスな過去と、ひたむきな今と、幸せな未来。
こんな構成を作るのが好きなんですv

見て下さってる方の『今』が、私の言うどの時間軸に当て嵌まっているかどうかは判りませんが。

ね？辛くて苦しくても、暗くて抜け出せない今でも、悪くないですよ？

暖かで穏やかな虹色の未来は、ほんの一步分先かも知れないのですもの。

私は、書き始めがシリアスで血みどろでも、最終話は優しい未来で
ありたい。

もしも、読んで下さった方にも、この未来が優しいものに映って下さったとしたらとても幸せですv v

最後にもう一度、このリハビリも兼ねたお話&いつもと違うCP&

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

だからこそ更に未熟であろうお話に、お付き合い有難う御座いまし
たvv

反応などもし頂けましたら、飛んで喜びますvv

ふつつかな奴ですが、どうかまたお会いできれば嬉しいです(^-^)

^*(^)

2007/09/20・作者@朧月オホロツキ

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6833c/>

この願いが届くのならば..... [裏] ~ Side Conan ver ~

2009年6月27日05時20分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。